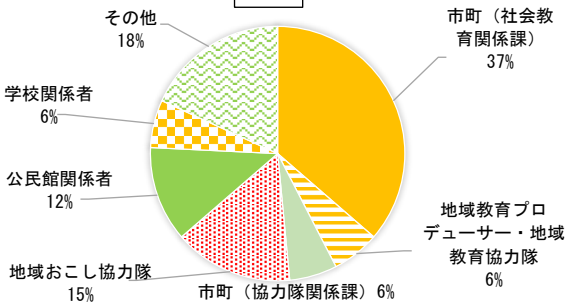
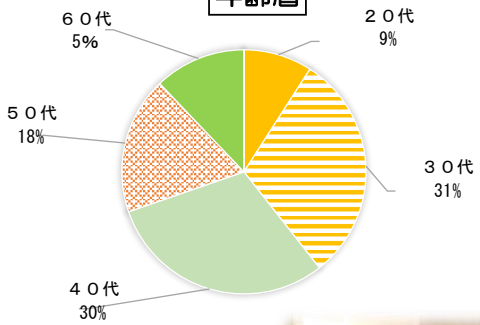
令和４年度「地域教育プロデューサー配置支援事業」
第１回地域教育プロデューサー等ステップアップ研修会及び第1回情報交換会
アンケート結果・Q&A

○　アンケート回答者33名

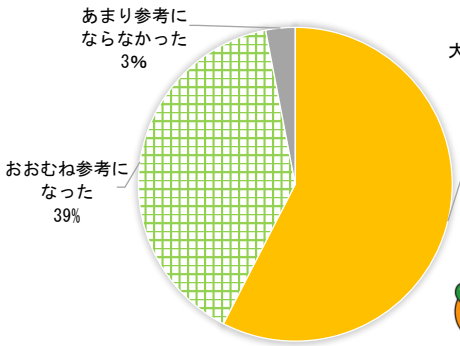
所属



年齢層



Q1　講演・トークセッションについて

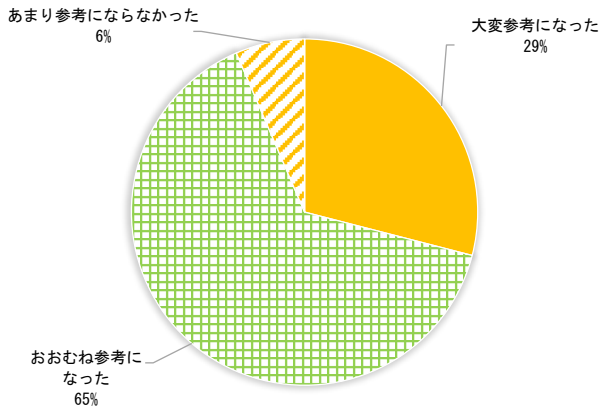


【感想・意見等】

○具体的な話を聞けてよかった。今後の自分の事業の参考にしたい。
○実体験を主にした内容が多くあり、とても参考になった。地域おこし協力隊の事業や活動を知ることができた。
○行政主体の事業に地域おこし協力隊が関わる事例を聞くことができて参考になった。具体的な事例紹介が、実際に取組を行う上で参考となった。
○着任１か月で不安があったが、自分の目指すところが間違ってなかったという安心感をもらった。「地域と学校をつなぐことで、楽しそう、幸せそうな大人の姿を生徒に見せることの重要性」や「自分を知っている地域の方が長く居ると子どもたちが戻ってきやすい」が強く印象に残った。本多さんの成功例、また楽しまれながら取り組んでいることに勇気・やる気をいただいた。
○協力隊の立場で活動され、任期が終了した後も地域に根付いて生活している先輩の話を聞くことができて、非常にモチベーションがあがった。
○地域教育プロデューサーも地域おこし協力隊もいない地域だが、参考になった。
○非常に参考になる事例を聞くことができてよかった。今後の社会教育活動に活かしていきたい。
○好事例を知ることができ、自分でも何かできる可能性を感じた。改めて社会教育・学校教育の必要性を感じ、自分自身のモチベーションが上がった。
○文科省から指定された新事業のことや魅力化推進校として行うべきものをどのように進めていくか検討している我々にとって非常に勉強になった。
○活動の様子がよく分かるスライドに、本多さんのお人柄がよく分かるお話がとてもよかった。また、移住支援はあくまでも手段であり、地域のみなさんの笑顔を増やすことということがとても印象に残った。
○本多さんの地域での活動を詳細に知ることができてよかった。地方部で抱える課題を解決できるヒントになる内容だった。
○双海地区ならでは、双海地区にしかできないのではないかと思える活動だと思った。とは言え、類似の事業をしようと思った際には、一度現地で実際に見てお話を聞いて参考にさせていただきたいと思う。
○県内の地域教育プロデューサーの事例を知ることができた。本多さんの活動は、表立って教育とは感じさせない自然体での取組であり、その盛り上がりが素晴らしいと思った。
○地域と公民館のかかわりがとても深く、互いが助け合うことで様々な事業や活動ができているという非常に参考となる内容だった。自分の職場に持ち帰り、還元できたらと思う。貴重なお話をありがとうございました。
○活動を何のためにしているのか、手段だけではない、目的は何か（「地域の笑顔を増やしたい」というテーマは、自分自身にも当てはめ、心がけたいと思った。大勢の方の協力あってこそ、その機運をどう高めるかが課題だと思う。

【感想・意見等】
〇本多さんの講演を非常に興味深く聴講することができた。すごく素敵な地域教育、交流をされていて、とても参考になった。移住し、地域活動するのには色々苦労もあった中で、積極的なアプローチをし、「地域の笑顔を増やしたい」というご自身のしたいことを実現するお話には、心を打たれ自分へのモチベーションアップにもつながった。
〇双海地区の熱心な取組が広まっていけばいいと思いう。県下の実情が違うとはいえ、地域の活性化、持続化のためには、動き出すことが必要だなと感じた。また、本多さん、伊予市の石崎さんがおっしゃっていたとおり、公民館の役割は大きく、連携が必要だと思った。そのために、もっと社会教育（特に公民館）に携わる方にも参加していただいたらいいと思う。
〇全体的な話から具体的な話まで網羅してくださり、お二方の魅力と共に、人とつながる楽しさ、可能性などが伝わってきた。概要と具体と、立場によって分けて話してくださったことも良かったが、関心のあるところを深堀りしていくトークセッションも、とても良かった。
〇いろいろな立場、役職の方々が参加していたが、それぞれが地域おこし協力隊等による本事業のねらいや意義、効果がよく伝わる講演であった。地域教育や地域づくりを推進していくために、地域おこし協力隊制度を活用する価値を考える機会となった。もしかすると市町教育委員会担当者が今後、教育に関わる地域おこし協力隊の配置を要望する機会となったかもしれない。
〇双海町がフィールドとなる事業については、過去にも多くの方からの報告をお聞きしたが、移住者の視点からのお話を聞かせていただくことで、双海の地域力の高さを改めて感じさせられた。双海町での本多さんの取組は本当に見事だが、本多さんを活躍させる地域の素地があってのことだとも感じた。「地域力」の高い地域に、「熱意ある人材」が加わることで巻き起こる反応は、想像を超える有益な「財」を生み出すことを感じた。

Ｑ２　情報交換会について



【感想・意見等】
〇他の地域の方の活動を知ることができてよかった。地域の現状を聞くことができてよかった。
〇地域おこし協力隊の担当として公営塾で委嘱された隊員の考えを理解するよい機会となった。
〇プログラミング教室の内容は大変参考になった。
〇地域は違えど、同じ課題感で取り組む仲間との交流は時間がいくらあっても足りない。
〇自分の立ち位置・ポジションによって活動のしやすさや幅が変わる。
〇キックオフということもあり、制度についてあまり深入りできなかったのは残念だが、実際に地域教育プロデューサーの方々の生の声が聞けてよかった。
〇市町の悩みがよく分かり、意見交換の場が持ててよかった。
〇同じ公営塾関係の方々と同グループになり、それぞれの地域の課題に共感すると同時に自分の現場での取組を見つめ直す機会になった。
〇他市町の状況が聞けて非常に参考になった。今後、教育に特化した協力隊を募集する際に活かしたい。
〇各市での課題や解決方法などが参考になった。他の自治体の状況を知ることができ、参考になった。
〇時間が短かったが、テーマ以外のことでも話が盛り上がった。一泊研修くらいしてもっと内容を深めたいくらいに思った。
〇他市町での状況、課題がそれぞれあり、簡単に解決できるものではないが、視野を広げてヒントを見付け出したいと思った。
〇県全域を対象とした本研修会によって、講演を聞いたうえで同じような立場同士で情報交換できたことは参加者として有意義を感じたのではないか。また行政職員同士でも配置について具体的な情報交換ができていた。
〇焦点を絞った有益な情報交換には至らなかったが、参加者同士がお互いの取組に関心をもち、積極的な情報共有が図れていた。ある程度、効果的な情報交換となった。個人的にも後日、メールやＳＮＳを通して情報交換が続いている。情報交換がつながりのきっかけになった。

【感想・意見等】
〇時間がもう少し欲しかった。いろいろと深く話していく中で解決策が見つかるような気がした。
〇地域おこし協力隊の制度を活用したという前提で、良い人材がいるかどうかという問題点が浮かび上がった。また、３年という縛りのある中で「継続性」が最大のポイントになると思った。
〇地域おこし協力隊、地域教育プロデューサー等が情報交換をすることは大変有意義であると思う。しかし、導入予定がなく、また地域おこし協力隊を所管していない市町教育委員会の担当者にとっては、現実味のない話となり中身を充実させることが難しい。この情報交換会に、各市町の地域おこし協力隊を所管する担当者が参加することが望まれる。

Ｑ３-Ｑ&Ａ①　参加者の方々からの質問に、講演講師のお二人にお答えいただきました。

Ｑ１
県外から移住する際にどんな不安がありましたか。また、愛媛への移住は、どういった時に考えるようになったのでしょうか。移住を考えている人たちは、何を参考にされているのでしょうか。
（公民館関係者、学校関係者より）

Ａ１
【板垣氏】
　2011年の東日本大震災をきっかけに地方移住を本格的に考えるようになりました。それまでも、当たり前のように満員電車での通勤や深夜まで続く残業、家族との時間の少なさなど、都会での暮らしの中で当時の暮らし方に疑問を持つようになりました。
　移住を考えている方たちはＷＥＢサイトでの情報収集がまず初めに参考とする機会かと思います。
【本多氏】
　私の場合は移住先が比較的いなかの地域だったので、地域の方々に受け入れてもらえるかという不安は多少ありましたが、地域おこし協力隊という形だったのでそこまで大きな不安はありませんでした。担当職員さんや先輩協力隊の方と移住相談の時点から面識があったからかも知れません。
　私が地方移住を考えたのは子育てをする中で、都市部の環境が適していないと判断したからでした。愛媛がいいなと思ったのは、妻の出身地でありよく帰省していたので、気候風土や人々の気質、土地勘などもあり、そういった部分で良さを感じていたからです。
　移住で何を参考にするかですが、移住相談窓口で耳にする限りでは人それぞれのようです。しかし愛媛と直接縁のなかった人からは「ネットでの情報をみて良さそうだったから」という言葉をよく耳にします。立場柄、相談窓口や移住イベントなどに積極的に参加する方からの声を耳にすることが多いのですが、そういった方々は、情報入手のしやすさや、相談に応じた担当者や相談員の方の印象も大きいようです。

Ｑ２
子ども教室実行委員会での地域の有志の方やソフトボールメンバーなどの人集めをどのように行っているのかを教えてもらいたいです。何をするにも人集めが課題です。（公民館関係者）
Ａ２
【本多氏】
　子ども教室での有志の方は、長年のつながりの方が多いのですが、保護者の中からボランティアスタッフ（わが子と一緒に参加しつつ子どもたち全体のサポートをする）を担ってくれる方が一定数います。これはプログラムに応じて事務局である双海地区公民館からさり気なくなく声かけをしている成果だと思いますが、プログラム自体に魅力があるため、保護者としても一緒に参加したくなる部分もあると思います。そういう方の中で何度も参加しているうちに、より深く関わってくれるようになる方もいます。
　ソフトボールに関しては狭い集落の中ですので、自分が体育部長をしているときは（3年ほど連続でやっていましたが）、開催日（の計画）が年度初めに分かるので、早い時期からメンバーに「今年は〇日やから仕事休みの調整よろしくね！」とシフト勤務の方々に日程調整をお願いしていました。機運が高まっていたり本人の意思も前向きになっていたりするので、可能な限り調整してくれる人がほとんどで、結果的に面子が揃うといった感じです。また、公民館全体には、集落放送で練習や大会の情報を伝えたり、応援のお願いをしたり、結果の報告をしたりと、直接関わっていない地域内の方々にも活動のPRをしていました。

Ｑ３
①板垣さんや本多さんが思う「地域教育」または「社会教育」とは？
②「地域教育」または「社会教育」を発信するための具体的な取組方法とは？
③若者世代と高齢者との世代間のギャップを埋めるためには？（市町教育委員会職員、公民館関係者より）
Ａ３
【板垣氏】
①：地域教育とは、地域を好きになるための教育だと思います。
②：子どもたちにその地域の魅力を地域行事や学校のカリキュラムを通して伝えることが必要です。
③：地域での行事が若者と高齢者が関わる機会かと思うので、そのような機会を多くつくる（絶やさない）取組を行うことでしょうか。

【本多氏】
私が思う「地域教育」は、その地域で安心して生きるための環境づくりです。コミュニケーションを取り、隣人と仲良く楽しく暮らすことは平時においても非常時においても、お互いに助け合いながら生き抜くためにとても大切なことだと思います。日頃からそういった関係を築いておくことがひとつ。また、そのための現在の担い手の確保、未来の担い手の育成、これこそが「地域教育」だと思います。大人が子どもに教えるのではなく、お互いに学び共感し合うという教育だと思います。
世代間ギャップは、基本的に埋まらないと思ってます。ただお互いに尊重し合うことで理解し合おうという気持ちにはなれると思います。個人的には高齢者世代から昔の話を聞くのはとても楽しいので、おじいさんの昔話を長い時間聞いてることは結構あります。結局はコミュニケーションと信頼感だと思いますので「よくわからんがコイツがそう言ってるので聞いてみるか・そういうこともあるのかも知れない・任せてみるか」となれば、ギャップを埋める必要はないのではないかとも思います。

Q4
地域おこし協力隊員が地域に入り、教育的な活動を実践しようとした場合、人の顔が見えるくらいの比較的小さい集落だと、その効果が出やすいように想像します。市街地の集合住宅が立ち並ぶような地域で活動を展開しようとした場合に、板垣さんや本多さんなら、企画や運営に対してどのような配慮を心がけますか。（教育事務所職員）
A4
【板垣氏】
地域おこし協力隊という行政に近い身分として、教育に関連する行政機関や学校などと密に連携することが大事かと思います。
【本多氏】
仰るとおり、市街地など人口規模の大きい地域では効果が見えにくい面があるようにも思いますが、それは母数が大きいからであり、小さい集落でも全員が必ず参画しているわけではありません。どんな規模でも最初は新しい動きを受け入れ、協力してもらえるようなコミュニティから始まると思いますので、そういうところから機運を広げていくということは同じような気がします。ただコミュニティを形成する人の数も大きい可能性はありますのでその中での温度差は出てくるかも知れません。その場合は「その中でも熱量の高い人たち」という括りの「見えないコミュニティ」を意識していってみるのもよいかも知れませんね。逆に熱い人たちの機運が高まってきたらそれがコミュニティ全体に波及することで、より大きなムーブメントになる可能性もあると思います。そういう意味で心がけることと言えば、状況や反応を見ながら適度なスピード感と規模感を目立たずにコントロールしていくことでしょうか。
また、「最初から全員に届かないから」と小さなコミュニティ内のみで動くのではなく、情報発信や誘いは常に全体に向けて行うことも大事だと思います。全体に声かけ発信していることに、熱量の高い小さなコミュニティから応えてくるというイメージですかね。

Q5
今回の研修会で感じたことや、教育に関わる地域おこし協力隊や地域教育プロデューサー・地域教育協力隊の可能性や課題等について感じたことを教えてください。（県教育委員会社会教育課職員）
A5
【板垣氏】
一番気になっているのが、教育ミッションの協力隊の任期後の生業についてです。100%の収入源としなくても、少ない額でもミッションで携わった事業を何らかの形で続けられることが理想です。教育の分野はどれだけ継続的にできるかが大きいと思いますし、成果は中長期なスパンで考えなければいけないと思います。
地域教育プロデューサー制度を管理する側として、生業にするためのアドバイス、就業の情報（例：ICT支援員）、報酬を与える仕組みや機会（講師の依頼など）を整備することで、協力隊にとって不可欠な制度になるのではないかと思います。
【本多氏】
後半の意見交換を聞いていて感じたのは、教育関係（特に公営塾など）のミッションで入っている協力隊は、実務（学習支援）に追われたり、それを求められたりしていて、仮に動きたくてもなかなか思うように動けない状況がありがちということでした。
また、対象としている年齢によっても違ってくると思います。
地方における公営塾の意義は分かりますし、そこにニーズもあるわけですから、場合によっては学習支援（学力向上支援と言うべきか）と、社会教育・地域教育（ふるさと学的な地域との関わり支援）の支援者は切り分けて考える方がいいのかも知れないとも思いました。両方をやるのはハード過ぎます。
個人的には、教育関係の協力隊と括ったときに、後者のような活動をしている方にも、もっと仲間に入っていっていただけると幅が広がっていいなと思いました。どうしてもミッションからリーチしていくと公営塾関係者になりがちですが、地域支援や地域活性の目線からリーチしていけば、それ専門でなくとも、ふるさと学的な活動をしている方がたくさんいるはずです。そういう方々も含めたカテゴリーを確立していけると嬉しく思います。
そう考えると（ふるさと学的）教育支援は、地域振興そのものかも知れません。人材育成ですからね。そんな人材や活動が増えていったら、楽しく幸せな、そして持続性のある地域が増えるような気がします。なので、これらに携わる皆さんには大きな可能性があると思いますし、それに関わる人の輪を広げていけたらその可能性もさらに広がるのではないかと思いました。

Ｑ３-Ｑ&Ａ②　その他の質問事項

Ｑ6
　行政側や各市町から、協力隊の成果など、評価を聞く機会を作っていただきたい。いつも協力隊が発表して自己評価していることが多いが行政としてどう思っているのかを知りたいです。（地域おこし協力隊）
Ａ6
【県地域政策課】
　委嘱元の隊員と各自治体とのやり取りに関しては、国が作成した「地域おこし協力隊の受入れに関する手引き（第４版）」において、地域おこし協力隊の活動方針及び活動内容について、協力隊活動初期の段階を中心に、受入地域と隊員の間に行政の担当者も入り、十分な協議を行うことを求めています。そのほかにも地域おこし協力隊の取組が部署横断的な性格を持つことから、自治体内部で共有する必要性も述べられており、そういった関係者による話合いの場で、お互いの考え（評価など）が示されると考えています。
　また、県全体での協力隊に対する考えについては、各市町を通じご相談いただくことで、各種県事業への反映が検討できると考えています。

Ｑ7
　地域教育プロデューサーになるメリットは？地域教育プロデューサーに登録後、行政とはどのような関わりがありますか？（市町教育委員会社会教育関係職員）
Ａ7
【県教育委員会社会教育課】
　メリットは、大きく２つあります。
①【活動の場の広がりと定着・学校と地域との連携強化】…登録後に県が発行する「登録証」とともに、持ち運びしやすいよう、サイズの小さな「証明証」も送付いたします。この「証明証」を学校や地域での活動の際に提示することで、活動が以前よりもやりやすくなったという声もいただいています。
　また、地域教育プロデューサー及び地域教育協力隊にご登録いただいた折には、県のホームページや県教育委員会社会教育課及び県地域政策課の研修会等の場での広報をはじめ、学校現場への働き掛けを通して活動拠点の市町への周知を図ります。学校や地域への認知度が上がることによって、活動の場が広がりと、定着につながり、各市町や地域教育プロデューサー等の取組の後押しができるものと考えています。
②【情報収集＋スキルアップ＋ネットワーク構築】…「地域教育プロデューサー等活動支援・ステップアップ研修事業」として、県内外の先進事例等をもとに学びを深め合う「地域教育プロデューサー等ステップアップ研修会」を年３回実施します。県下全域から地域教育プロデューサー・地域教育協力隊、地域おこし協力隊隊員、市町職員、学校関係者等が一堂に会して、先進事例による研修やワークショップによる研修を行いますので、地域教育プロデューサー・地域教育協力隊のみなさまには、活動の定着や拡充に向けてのヒントをお持ち帰りいただくとともに、連携・ネットワーク形成につなげることができます。
　また、定期情報交換会を年３回程度実施します。東・中・南予管内ごとの情報交換会も含め、地域教育プロデューサー及び地域教育協力隊それぞれの活動が円滑に進むよう支援します。
　さらに、県では市町の教育関係者等を対象とした学校・家庭・地域連携推進事業での「地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの一体的な取組推進研修会」「放課後子ども教室・えひめ未来塾指導者研修会」や「愛顔でつなぐ“学校・家庭・地域”の集い」などの研修会を実施していますので、これらの研修会に参加していただくことが可能です。学校・家庭・地域連携推進事業関係者、市町職員、学校関係者、団体、企業、ＮＰＯ、地域教育関係者等とのつながりが生まれます。
　行政とのつながりについては、上記での関わりも含め、研修会等のご案内を通して、定期的に情報共有させていただいています。
　なお、地域教育プロデューサー・地域教育協力隊を配置するのは各市町ですので、市町教育委員会と市長部局が連携していただきながら、これらのメリットを生かして、それぞれの地域の課題解決に向けて本事業を進めていただくことで、より効果的な取組になると考えます。

Ｑ４　全体の感想、本事業についての意見、要望等

【意見・要望等】
〇貴重な機会をありがとうございました。プロデューサーの役割・意義をもっと学校側に轟かせたい。（地域教育プロデューサー）
〇同じ悩みを抱えている方、経験された方のお話を伺えたり、ともに感がえられたりできる場を設けていただき、大変良かった。（地域おこし協力隊）
〇県教育委員会の皆様が楽しい方々だと分かった。（地域おこし協力隊）
〇様々な立場から教育に携わる方々とお話ができて、刺激になった。また機会があれば参加したい。ありがとうございました。（地域おこし協力隊）
〇直接話をする機会が大切だと思った。ありがとうございました。（学校関係者）
〇対面での開催がよかった。（市町教委社会教育関係職員）

〇初めて地域教育プロデューサーというものを知った。行政、教育、協力者との連携をもっと深めていきたいと思った。（公民館関係者）
〇もう少し、みなさんとお話しできる時間が欲しかった。プライベートなことからお仕事に関するディスカッションを深めたかった。コロナ禍でなければ、欲を言えば、懇親会などできるとさらに交流を深められると思った。今日はこのような機会をありがとうございました。（公民館関係者）
〇参集の情報交換会は大変楽しく、各市町の状況が参考になった。（市町教委社会教育関係職員）
〇久々に対面式での研修に参加して、改めて顔を合わせての交流は大切だと思った。次回も参加できればと思う。（学校関係者）
〇横のつながり、連携はとてもこの事業で重要なことでホリバタ事業にも共通する部分であり、とても良い機会で参考になった。各活動、イベントでの発案や、具体的な取組方法、周知の方法、地域を巻き込んだ活動方法を深く掘り下げていただけたらうれしい。（市町教委社会教育関係職員）　　など…